

号外

令和7年度
第12号

Tobu通信

東部教育局
東教発 R 8. 3. 1 3特別支援教育
ワークショップ特別支援教育の現在地とこれから
～次期学習指導要領改訂を踏まえ、
私たちは何を目標として進んでいけばいいのだろう～

鳥取県教育委員会事務局参事監兼特別支援教育課長 加藤 典子氏に御講義いただきました。参加された先生方の振り返りから、今回の講義が単なる知識の伝達にとどまらず、「視点の転換」と「具体的な行動の明確化」に繋がったことが強く伝わってきました。本号では、振り返りを集約し、参加者の皆様に共有していただいた「これからの特別支援教育の指針」について整理しましたので、今後の取組の参考にしてください。



視点の転換：「医学モデル」から「社会モデルへ」

- 「障がいの社会モデル」という考え方には、大変感銘を受けた。本人の特性を変えるのではなく、周囲の考え方や環境を工夫し、障壁を取り除くことによって「障がい」そのものを解消するという視点は、非常に希望があると感じた。
- 児童の困り感を子ども自身の課題としてだけでなく、環境や支援の在り方の関係の中で考えていくことが重要だと学んだ。



「できない」ことを本人の特性のせい（医学モデル）にするのではなく、「環境との相互作用」として捉える視点が多くの方に響きました。



具体的な行動の明確化：「できる」を伸ばし、認め合う文化

- 今日まで、個別の指導・支援をどうしていくかということに目が向いていた。一対一の支援に閉じず、学級全体の「認め合える雰囲気」や「お互いさまの空気感」を作ることが大切だと感じた。
- 子どもの話を聴き、一人一人の努力を正當に評価したい。
- 最終的に子どもたちは地域で育っていくということから、インクルーシブ教育について考えていくことの必要性を感じた。



「子どもは放っておいても育つが、大人の関わりで大きく変わる」という言葉どおり、丁寧な観察と肯定的な評価が土台であることを再認識しました。



今後の方向性：「個別最適な学び」と「協働的な学び」の融合



- 「通常の学級における特別支援教育の充実」が、インクルーシブ教育の基盤であることを学んだ。
- 環境整備と支援の質を常にアップデート（評価・見直し）し続ける必要性を感じた。

特別支援教育は、一部の子どものためのものではなく、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を具現化する最前線の教育であるという理解が深まりました。



「共生社会の形成に向けた教育の推進」を目指すためのたくさんの示唆をいただきました。本ワークショップを校内研修の一つとして位置づけ、校内の多くの教職員が参加してくださった学校もあり、大変うれしく思います。また、ワークショップに参加できなかった先生方から、加藤参事監の御講義を聴きたいとの要望が多数ありました。そこで、加藤参事監の御講義についての動画を令和8年3月27日（金）まで限定公開いたしますので、右の二次元コードからデータを読み込み、ぜひ御視聴ください。

【講義動画
二次元コード無】

社会教育
ワークショップ

コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の
連携強化に向けて

本ワークショップは、学校運営協議会において日頃感じておられる課題や悩みを共有するとともに、模擬熟議を行うことを通して、多様な視点から課題を捉え直し、新たな発見と気づきを獲得することをねらいとして行いました。

熟議を用いての課題解決に向けて

熟議の様子を動画視聴し、動画の感想や学校運営協議会・地域学校協働活動について日頃感じている課題や悩みを出し合いました。グループで話し合う中で、模擬熟議の「テーマ」につながるものも出てきました。

- ・子どもの学力の土台を地域で支える
- ・10年後のコミュニティ・スクール
- ・地域の人と学校とのつながり直し
- ・地域の人と人とのつながり直し など



模擬熟議

グループ内で設定したテーマについて、普段とは異なる立場に立って熟議を行いました。(例: 推進員→教職員、教職員→保護者、地域の方→推進員)

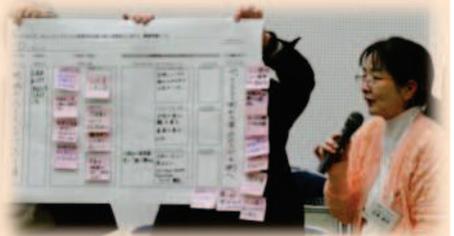
「目指す子ども像」の実現のために、「現状の姿」と「目指す子ども像」とのギャップを書き出し、学校・家庭・地域が一緒にできる解決のアイデア・手立てを整理し、優先順位を付けました。



全体共有

「テーマ」「目指す子ども像」「解決のアイデア」を全体共有しました。

- (例) テーマ : 地域の人と人とのつながり直し
 目指す子ども像: 「やってもらう側」から楽しみながら「やる側」へ
 解決のアイデア: 子どものニーズを組み入れられる工夫(学校)
 子どもが来ると親も来る。家庭を巻き込む(家庭)
 子どもが大人に教える。おじいちゃん、おばあちゃんのためのスマホ教室(地域)



ワークショップ全体のまとめ



鳥取市教育委員会事務局
生涯学習・スポーツ課生涯学習係
地域学校協働活動統括推進員
藤井 健 氏

- コミュニティ・スクールの1年間の流れをしっかりと意識したうえで、ワークショップ形式での熟議による目標・ビジョンを学校・地域・保護者等で共有することが何より重要。
- RV-PCDA(調査→目標→計画→実行→評価→改善)により学校運営協議会と地域学校協働活動の一体的な推進を図ることが大切。

参加者の感想より

- 熟議の進め方が分かりやすかった。学校・保護者・地域の立場で考えることのよさが実感できた。
- 他の地域でも似たような課題があることが認識できた。今後の活動の参考になるアイデアを聞いた。
- 学校運営協議会のあり方、地域学校協働活動の意義をあらためて考えさせられた。



学校運営協議会に参加する多くの当事者が、学校や地域の課題を共有し熟議することで、互いの立場や果たすべき役割への理解を深めることができます。それぞれの役割に応じた解決策が洗練され、それぞれが納得して自分の役割を果たすようになることが期待されます。ぜひ、熟議を通して皆様の学校や地域で「目指す子ども像」の実現や目標達成につなげていただきたいと思います。